

# あおい通信 第135号

## 日本の世界遺産めぐり その十九 明治の産革遺産⑦ (文化遺産)

### (イ) 惠美須ヶ鼻造船所跡

「えびすがはな」は山口県今浦波戸萩市椿東中小畑にある、長州藩が設けた洋式帆船を建造した造船所跡の遺跡である。

ロシアの造船技術による丙辰丸とオランダの造船技術による庚申丸が建造されており、同じ造船所内に異なる外国の造船技術が共存する唯一の造船所であり、数少ない西洋式造船所の遺構であつて、近代技術の導入期を知る貴重な遺産である点が評価され、二〇一五年に「明治日本の産業革命遺産、製鉄・製鋼、造船、石炭産業」として正式登録された。

一八五三年、アメリカ合衆国やイギリス、ロシア帝国などの西欧諸国の軍艦の相次ぐ日本近海への出現が江戸幕府や諸藩の脅威となると、幕府は、安政の改革の一環として藩政に対して大型軍艦の建造を禁止した「大船建造禁止令」を撤回した。

浦賀警備に当たっていた長州藩に対しても大船の建造を要請、財政上の理由から長州藩は消極姿勢を示したが、桂小五郎が軍艦建造の意見を藩に提出したことなどから、翌一八五四年には、藩主毛利敬親が洋式軍艦を建造することを決定。日本で初の本格的な洋式帆船である君沢形(スクーター)軍艦を建造していた伊豆国戸田村に、船大工棟梁の尾崎小右衛門を派遣した。尾崎は戸田村でスクーター船建造にあたった高崎伝蔵らを招請して藩に戻り、翌一八五六年、小畑浦の惠美須ヶ鼻に軍艦製造所を開設した。同年十一月、萩藩最初の洋式軍艦である丙辰丸が、一八六〇年には長崎の海軍伝習所でオランダのコットル船建

惠美須ヶ鼻造船所跡



大板山たたら製鉄遺跡の高殿跡



入する方針に変更し、艦船建造は行われなくなり、閉鎖されたものと考えられている。

「おおいたやま」は、山口県萩市にある江戸時代の製鉄所跡である。国の史跡、世界遺産構成資産。江戸時代中期から幕末にかけて断続的に操業していた製鉄所跡。大井川の支流である山の口川の上流部に位置しており、砂鉄を原料に、木炭を燃焼させて鉄を生産する日本古来の方法「たたら」で製鉄していた。

本遺跡は山口県内最大級の規模を誇り、長州藩に展開した石見系たたら遺跡の典型的事例として、多くの遺構が良好に残っている貴重な遺跡とされる。

造技術を学んだ藤井勝之進によって、二隻目の庚申丸が造られた。丙辰丸建造の際に用いられた鉄は、大板山たたら製鉄遺跡で伝統的な製鉄法であるたたら製鉄によって造られており、洋式技術と日本伝統の技術が組み合わせられた稀有な例である。しかし、その後蒸気船が主流となると、長州藩は、外国製蒸気船を購

別問題は十一月の大統領選挙にどんな影響を与えるか? 世界は確実に変わりつつある。(やぶにらみ)

### 世評・時評

あおい通信の読者がこのコラムを読んで下さる頃、新しい都知事も決り、一連の騒動に決着がついてると思う。参院選は改憲勢力の圧勝で、安部首相は憲法改正に意欲を燃やし、金融緩和でアベノミクスを推進させようとするだろう。

今年の年頭、片山社長が「今年は相克、どんなドラマが」と書かれた時、相克・相性なんていう古い中国の考え方がそうそう当たるかなと、少し多寡を括っていた。しかし年初から数々の

異変は、主なものだけでも、イスラム国によるベルギー国際空港テロやアジアに広がる自爆テロ。仏、ニースで暴走トラックテロ。トルコのエジプト機墜落データ未遂事件。北朝鮮の水爆実験と中距離ミサイル打ち上げ成功。とキナクさい。台湾・熊本・エクスドル等の大地震。イギリスの国民投票によるUJ離脱は、世界中に衝撃を与え、少し落ち着いたが多大な経済的影響を与えた。昨年のエルニーニョがラニーニャに変わり、世界的な天候異変は、例年余り雨の降らないドイツ・

フランス・中国等に豪雨をもたらして、大洪水を起した。四月の大地震後、まだ復興も盛ならない熊本に、六月に雨の降らなかった日は三日とか。関東は空梅雨で水不足なのに、熊本や九州地方の豪雨は短時間で未曾有の雨量であった。七月にやっ

雑記帳  
— 思い付くままに —  
額田美保

こう羅列すると、今年の出来事はもうドラマなんて生易しいものでなく、驚天動地、天変地異。いまアメリカでは銃乱発事件等から、白人警官が神經過敏で黒人を銃殺したり、黒人による白人警官銃撃など、新たな人種差

可哀想な私、何故かそう思う時がある。あの時もそしてあの時も、私は何時も一人で、なにかもかも背負って来た様な気がして居るのだが、それでも又直ぐ何事も無かった様な日々を続けて来たのである。内に秘めた悉

「おおい通信」は、皆様からの原稿を募集しています。係員・飯島

7月の結果  
7日(木) 栃木県口倶楽部  
日帰りバス旅行、参加19名。道の駅、日光おかきでお土産を、昼食はロペ倶楽部でスペイン料理を堪能。



15(金) カラオケ  
バンバンにて。9名の参加でした  
(事務局長)

# 私の敗戦記

木村美代子

世界的な経済大恐慌の起った昭和三年に生まれ、私は、満州事変・支那事変・大東亜戦争・戦後と、まさに激動の時代を過ぎました。しかも終戦の折には女学生。旧満州奉天で、多くの辛酸を嘗めました。昭和二〇年八月一五日の玉音放送が信じられなかった私は、翌日動員先の関東軍食料本廠に駆けつけました。ソ連軍が侵攻して来ているからと、部隊長から「女子は直ちに帰宅せよ」と、乾パンや手榴弾と青酸カリを渡され、初めて事の重大性に気付き、二時

## 絲綢之路を疾るの記(一)

シルクロード 入江昭二

葵デイで朝の体操が終わるとマット運動だ。マットに横になると喜多郎のシルクロードのメロディが流れてくる。(最近あまり流されることはない)この曲を聞くと、私の思いは西城シルクロードに飛んでいくのである。かつて、探検記「さまよえる湖ロプール」を読み、また映画「敦煌」(井上靖)を観て思いをめぐらしていたのであるが、今回そのチャンスが訪れた。

旅のスタートは蘭州から列車に乗る。ゴビ砂漠と祁連山脈の間のいくつかのオアシス都市を縫う河西回廊を西へ西へと列車は

間の道のりを、身を隠しながら家に戻りました。疲れきって寝た翌朝、騒音で目を覚まし、丁度帰宅していた姉と「ダワイ、ダワイ」と云う、獣の様なソ連兵に追われ、陸軍が駐屯していた小学校に逃げ込みました。そこも武装解除され、家も接収され、行く宛もなく困っている、心配した知人が迎えに来てくれ、自動小銃の音がパンパン鳴る中、その方の家まで走りました。

無政府状態の中、ソ連兵はやりたい放題！自動小銃を肩に、発砲掠奪、婦女子強姦は日常茶飯事で、私達女性は坊主頭で進む。この辺は甘肅省である。嘉峪関市で下車。万里の長城の西端である。長城東端の山海関(渤海湾)から6350kmに達する地点である。

この城塞は中国「明時代」のものである。古城の中に入ってみた。城壁だけの遺産だ。街からはなれた砂漠のなかの古城は人影なし、城郭だけの異様な風景であった。近くにオアシス都市酒泉という名の街にひかれ、立ち寄る。漢詩「涼州詩」の「葡萄の美酒、夜光の杯、飲まん」と欲すれば琵琶馬上に催す...の辺塞詩にある夜光杯の石器を土産に買う。ここから車で敦煌に向かうところで小雨にあう。雨は止んだが何処からともなく水

顔に灰を塗り男装して天井裏や野菜収納の地下に身を潜めたことも...、筆舌に尽くし難い恐怖の日々でした。 つづく

## なんでも落語講座 五

絹田治夫

この心理は、今の消火活動からは理解しがたい。「ホースから水を出すだけなのに、何が面白いんだ？」となる。

しかし江戸時代の消火活動は、水を出すわけではなかった。一旦火事になってしまったら、類焼を防ぐ「破壊消防」しか方法はなかったのである。火の動く方向を見定め、



洪水の様子

が押し寄せてくる。砂漠が水、水、水、道路が川の流れるようでもあり湖のようでもある。勿論、車もストップ。水量もタイヤの下端までに達してきた。先ほどまでの光景がうそのようである。砂漠で洪水に合うとは夢にも思わなかった。恐ろしい所だ。秘境に入るのはいそがしい。容易くないことが分かった次第である。水量も下がり車も動き出したオアシス都市敦煌に夜半に着いた。 つづく

破壊する建物を選び、その建物をあつというまに壊して一瞬のうちに空地を作り出す。鳶職の持つ鳶口という道具は、その破壊に役立つ。担当の組の纏持ちは屋根に飛び上がり、その下で建物を破壊する。纏持ちは崩壊寸前まで屋根に立ちつづける。火消はこうして、敏速な行動を繰り広げながら命をかける。それが「かつこい」のである。火除けのまじないとして、江戸末期では、体全体に色鮮やかな彫り物をしていふこともあった。それもかっこよかったのだろう。もちろん女性には大変もてたという。若者が憧れるのも無理はない。

## 「くわえ煙管」禁止

## ショートステイ体験記

島田 瑛一

この六月、ヒョンなことから初めてのショート・ステイを経験しました。実は、小生の女房が従兄弟の退院祝い(京都)に行くことになり、私が一人残るので、特養の『こぐれの里』に三日間、お世話になったのです。六月十三日(月)の朝雨の中、迎える車が来てくれ、歩行器と女房も一緒に乗り、『こぐれの里』に行きました。先ず玄関の受付で、靴の底から帽子や着ているものを上から下まで消毒されました。入所するのも厳しいと知りました。やがて書類の

## あおい俳壇・致壇

子の愛の 身にしむことの この頃を  
我が身の老いを なすすべ知らず  
八年目 柿成つたよと 孫の声  
二十年の今 小鳥ついでむ  
麻生伊登子

苗なす 空を群なし 鳥はゆく  
月見むと 夜空を仰げど 星もななく  
平岡 康

花びらの 垂れて静かや 花菖蒲  
朝庭に オレンジ色の 蝶一羽  
相田美代子



江戸に火事が多かったのは、冬に乾燥した風が吹き更に地震が火事のもとなる。そういう自然環境の中、100万人超えるという世界最大の人口を抱える都市が出現した。家々がぎっしり並び、

チェックを受け、部屋に案内されました。部屋は一人部屋の個室で、広さは七畳位あり、左手に洗面所、右奥にベッドがあり、正面にテレビが見えます。ベッドの右手にテーブルが置いてあって、立ち上がる所にはマットが敷いてあり、此のマットを踏むと事務室に分かるようになっていて、感心しました。呼出ベルはベッド横のガード部分に付いていて、細かく気配りがされています。マットに立つと職員が飛んで来て、大丈夫か確認します。広いリビングには長いテーブルが三つあり、四人掛けが二つ、真ん中に

危険このうえない。ふわふわ亭、わび助

## 自画像



私は建設機械メーカーの生産部門に長年勤務し、後半は半導体ビジネスに携わり国内外の半導体メーカーとの付き合い合いを来まして。現在、葵にて6ヵ月経ち漸く送迎の地図が描ける様になって来ました。これからも安全第一を心がけ、仕事をして参りますので、宜しくお願ひ致します。

二人居て、重度の女性のようにでした。私は左手の四人掛けのテーブルに腰掛けました。男の人が一人座っていました。十二時になると、葵より早く朝食が始まりました。男性の職員が来て、隣の人に「食べて下さい」と言ったが、返事は「要らん」。職員は「二度食べるように促しましたが、遂に痺れを切らしてスプーンで食べさせました。しかし、半分も食べると「もう要らん」と口をつぶってしまつたので、職員は薬を飲ませて朝食を片付けて終わりました。右の方のテーブルでは一人の職員が、二人の百才位の女性の間に居て、